

幕末明治の写真師列伝 第三十七回 内田九一 その二

梅本貞雄編『日本写真界の物故功労者顕彰録』（日本写真協会、昭和27年）よれば、「飯岡仙之助」（深香）については、以下のように簡単に紹介されている。

「飯岡仙之助」（深香）

内田九一門人、明治初年浅草瓦町に業を開いた。後、吉川雅武の写真館を継承した。

飯岡仙之助は明治9年12月発行の『東京寫真見立競』の中に「前頭 浅草瓦町 飯岡仙之助」とあることから、明治9年には内田九一から独立して、浅草瓦町にて写真館を開業していたと思われる。後明治15年秋に上野元黒門町五の吉川雅武の写真館を譲り受け移転した。

吉川雅武とは、これも前記によれば、以下のように記されている。

「吉川雅武」

石川県士族、幼時金沢より上京し、中村堇に写真術を学ぶ、明治十四年頃上野公園前に写真館を開いた。数年後上野元黒門町五に転じ、明治十五年秋、飯岡深香（内田九一門人仙之助）に業を譲った。明治四二年八月逝去享年五三。

内田九一の弟子の一人、飯岡仙之助の手記で、飯岡が内田九一本人から筆書きしたといわれる『故内田九一先生短歴』（毛筆書き、全九枚）ではあるが、この本文の内容を他の資料で再検証してゆくと、後述するが、内田九一の生年や没年など、いくつかの誤りが書かれていることが判る。

まず、内田九一の本名・諱についてだが、「増訂 武江年表（2）」に記されている本名は、「重」とあり、その読み方のルビは「おもし」と書かれている。また、石井研堂『明治事物起源』（橋南堂、明治41年）の「寫真術の始」に書かれた内田九一についての本文でも、本名は、「重」とあるが、その読み方のルビは「ぢゆう」と書かれている。

次に内田九一の「九一」は、その読み方を「くいち」といい、諱の「重」の漢字が「十」に通じるので「十」を「九」と「一」の二つに分けて「九一」という雅号を用いたものだという。「九一」については、『明治維新以後の長崎』（長崎小学校職員会編、昭和48年）には「内田九市」として『大日本人名辞書』と同じ簡単な略歴を記載している。また、妻木忠太編『木戸孝允日記 第一』（早川良吉、昭和7年）に「写真司九市の店に至り」、妻木忠太編『木戸孝允日記 第二』（早川良吉、昭和8年）に「九市の写真店に至る」などと記述が残っている。『日本人名大辞典（新撰大人名辞典）』などの昭和以降のものを除けば、内田九一の本名・諱について他に記述されたものは、明治19年4月15日初版発行の『大日本人名辞書』、明治27年6月25日初版発行（訂正改訂版大正14年11月20日発行）の関根只誠著『名人忌辰録』、底本が大正元年の国書刊行会叢書所収の『増訂武江年表』、長崎県教育会編纂による大正8年の『長崎県人物伝』の4つしか資料がないため、今のところは、これについて

はこれ以上何もコメントすることができないのだが、長崎県長崎市鍛冶屋町にある内田家の菩提寺、浄土真宗本願寺派大光寺の過去帳には、以下のような記載があることから、

釋教照恵明 嘉永六年正月拾日

萬屋町 内田忠三郎

教觀智明 安政五年七月二十六日

萬屋町 内田久市の母 ヤス

内田九一の名の読み方は「くいち」で、当初は「久市」と書き、後にこれを簡単な漢字の「九一」と改字して、称したのではないであろうか。また、「吉雄圭齋傳」（長崎県立図書館蔵）では、嘉永元年（1848）の記述に、「圭齋翁ハ廿四日ニ至リ親戚ナル内田九一及ヒ菊二接種法ヲ行ヒシ事」とあり、「内田九一」と記載されている。

次に内田九一の没年についてだが、『故内田九一先生短歴』では、「明治九年二月九日肺患に罹り病没ス」「三十有壺」としており、斎藤月岑『増訂 武江年表（2）』「卷之九」（東洋文庫118 金子光晴校訂、平凡社、1968年、底本は大正元年の国書刊行会叢書所収の『増訂武江年表』）では、「惜しむべし享年三十歳六ヶ月にして丙子二月七日卒せり。」（註：丙子は明治9年）、『月乃鏡』（桑田商会 大正5年10月）の「故内田九一先生」の項には、桑田正三郎編「明治九年二月三十余歳の壯年を以て病没す、子女なし。」と書かれているが、これらの諸書に書かれた内田の没年は全て誤りである。内田の没年は、明治8年2月18日付東京日日新聞の「寫真師内田九一歿す」という記事及び、明治8年2月19日付読売新聞の「寫真師の内田九一先生は久々病氣にて今月十七日に死なれました」という記事から、「有名なる寫真師内田九一氏は、昨十七日の曉きに病死したり、行年三十二」というのが真実になる。このことは『明治日本体験記』（東洋文庫430）（グリフィス著、平凡社、1984年）の序文（1876年5月10日）で「現存する人や有名な故人の写真、それに寺、彫像、古い絵、また大名、貴族の収集からの写真は、主に内田[九一]というまれに見る能力、腕前、熱意のある写真家によるものである。だが内田は不幸にして一八七五年（明治八年）に死亡した」という記述からも補足される。内田九一は明治8年2月9日頃から肺炎をこじらせ、同年2月17日の早朝に病死したというのがまず真相であろう。

次に生年についてだが、これも明治8年（1875）2月18日に享年32歳で亡くなっていることから、逆算すれば弘化元年（1844）の生まれであろう。

このように「故内田九一先生短歴」には誤りがいくつかあるのだが、これも「故長谷川吉次郎、故古賀金吾」という記載が末文にあり、長谷川吉次郎は明治11年頃まで、古賀金吾はおそらく古賀暁のことで、古賀は明治24年頃までは活動していたことから、飯岡は内田九一の没後数十年後に「故内田九一先生短歴」をまとめたもので、そのため飯岡の記憶違いの記述がいくつかあるのだろう。梅本貞雄の連載記事「内田九一写真記」の記述の誤りもこれによるとと思われる。

（森重和雄）